



～ 災害支援を終えて～ 被災地の光景と現実

能登半島地震 被災地派遣職員
秘書防災課防災係
大城 啓太 副主査



石川県七尾市に到着したのは今年6月初旬。小松空港から北上するにつれて、ブルーシートで屋根を覆う住家が増えていく光景。隆起した道路や倒壊したままの住家を目の当たりにして、発災から半年が経過しても、まだ被災地はこの状態なのかと驚いたことを今でも覚えています。活動拠点施設では、大きな亀裂が入った外壁、天井面から漏水する廊下、変形して開閉できなくなった扉など震災の爪痕を至るところで感じながら支援活動に従事しました。

今回の支援活動を通して、地震や津波といった自然エネルギーの大きさと復旧途上にある被災地の現実を見て、改めて防災・減災について備える大切さと重要性を再認識しました。

4月3日（水）。新年度を迎えた直後に襲った津波警報。訓練放送でしか聞くことのなかったサイレンの音が鳴り響き、市内各地で発生する交通渋滞。市役所には混乱する市民から多くの電話が相次いだ。元日に襲った石川県能登半島地震から数カ月後の出来事。私たちは先の災害から学び、適切な行動ができていたのだろうか。

今月は、7年ぶりに行われた糸満市総合防災訓練にあわせて、今一度、災害発生時の行動や必要な備えを一緒に考えたいと思います。



サイレンが鳴り響いたあの日。
私たちの行動は正しかったのか――